第47回法政大学懸賞論文　最優秀賞

ひきこもり状態の子を持つ父親に対する支援のあり方に関する研究
―親の会・家族会に着目して―

現代福祉学部福祉コミュニティ学科４年

渡邉　七瀬

目次

I. 研究の背景および目的 2

II. 研究方法 4
1. 調査概要 4
2. 分析方法 5
3. 倫理的配慮 5

III. 運営者に対するインタビュー調査の分析結果 6
1. 父親が置かれている状況 6
2. 所属団体に求める支援について 9

IV. 参加者に対するアンケート調査の分析結果 14
1. 回答者の基本属性 14
2. 自由記述回答からの分析結果 14

V. 考察 17
1. 父親に対する子育て支援の強化 17
2. 親の会・家族会への参加促進のためのきっかけづくり 17
3. 親の会・家族会による父親支援について 18
4. 今後の課題 19

VI. 結論 21

参考文献 22

巻末資料 24
1. 運営者に対するインタビュー調査の質問項目 24
2. 参加者に対するアンケート調査の質問項目 24

謝辞 25

I. 研究の背景および目的

日本において、ひきこもりは深刻な課題となっている。内閣府が実施した調査によると、日本のひきこもり当事者は推計 146 万人であり、15〜64 歳のうち約 50 人に 1 人がひきこもり状態に該当する（内閣府，2023）。また、ひきこもり当事者の主たる生計維持者として最も多いのは親であり、ひきこもりの相談は本人自身よりも家族が最初に訪れることが多い（東京都，2021）。松本（2021）は、社会には子に関わる問題を家族の責任として捉える前提があり、この前提がひきこもり者の家族の抱え込みを生みかねないと指摘している。このような社会において、ひきこもり状態の子を持つ親は苦悩を抱え、子がひきこもる原因を自分たちに求め、自責の念から将来への不安や悲観、絶望感を抱き、うつ状態に陥ることも珍しくない（厚生労働省，2003）。また、ひきこもり当事者の長期高年齢化に伴って親も加齢し、親が 80 代、子が 50 代を迎えたまま孤立する「8050 問題」も深刻化しており、親の負担や社会的孤立を防ぐための支援が求められる。すなわち、ひきこもり問題は当事者だけでなく、その親も支援の対象として考える必要がある。

ひきこもり状態の子を持つ親に対する支援としては、厚生労働省が「ひきこもり支援推進事業」の一環として、ひきこもり地域支援センターを設置し、当事者や家族を適切な支援に結びつける相談支援を行っている（厚生労働省，2024）。図 1 で示す通り、ひきこもり地域支援センター等の相談件数は右肩上がりに増加しており、地域における支援体制の強化や充実が急務であると考えられる。こうしたなか、東京都では、特定非営利活動法人青少年自立援助センターに委託をして「東京都ひきこもりサポートネット」を運営しており、メールや訪問など多様な窓口を通じた相談支援や、年に 12 回の家族セミナーの実施による家族支援を行っている（東京都ひきこもりサポートネット，2024）。

なかでも、ひきこもり状態の子を持つ親が、安心して気持ちを話せる人や場所、家族が経験や思いを共有し孤立感を和らげられる場として、「親の会」や「家族会」（以下、「会」）が挙げられる（厚生労働省，2003）。真壁ら（2014）は、「会」では親が安心できる場が提供されていると述べており、ひきこもり問題を相談できず孤立しがちな親にとって、「会」は 1 つの居場所となりえる有効な支援だと考えられる。野中ら（2023）によると、「会」で得られる効果には両親間で差異はなく、「会」の参加に至った場合は父親も母親も同様の効果を享受している。しかし、父親は母親に比べ支援やサポートを受けていない傾向にある（Funakoshi＆Miyamoto，2015）。「会」やひきこもり地域支援センターなどで何らかの支援を受けている家族を対象とした調査においても、回答者の割合は母親が 70.4％、父親は 25.1％に過ぎない（特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会，2023）。斎藤（1998）は、父親がひきこもり問題に熱心に関わるケースほど治療は進展しやすいと述べており、花嶋（2018）は、母親にとって父親の理解や協力が支えになっていると報告している。また、「会」などの支援やサービスを受けていない傾向にある父親は、1 人でストレスを抱え、現状に苦しみながらも孤立していると推察される。このような背景から、ひきこもり状態の子を持つ父親に対する支援に焦点を当てた研究が必要だと考えられる。

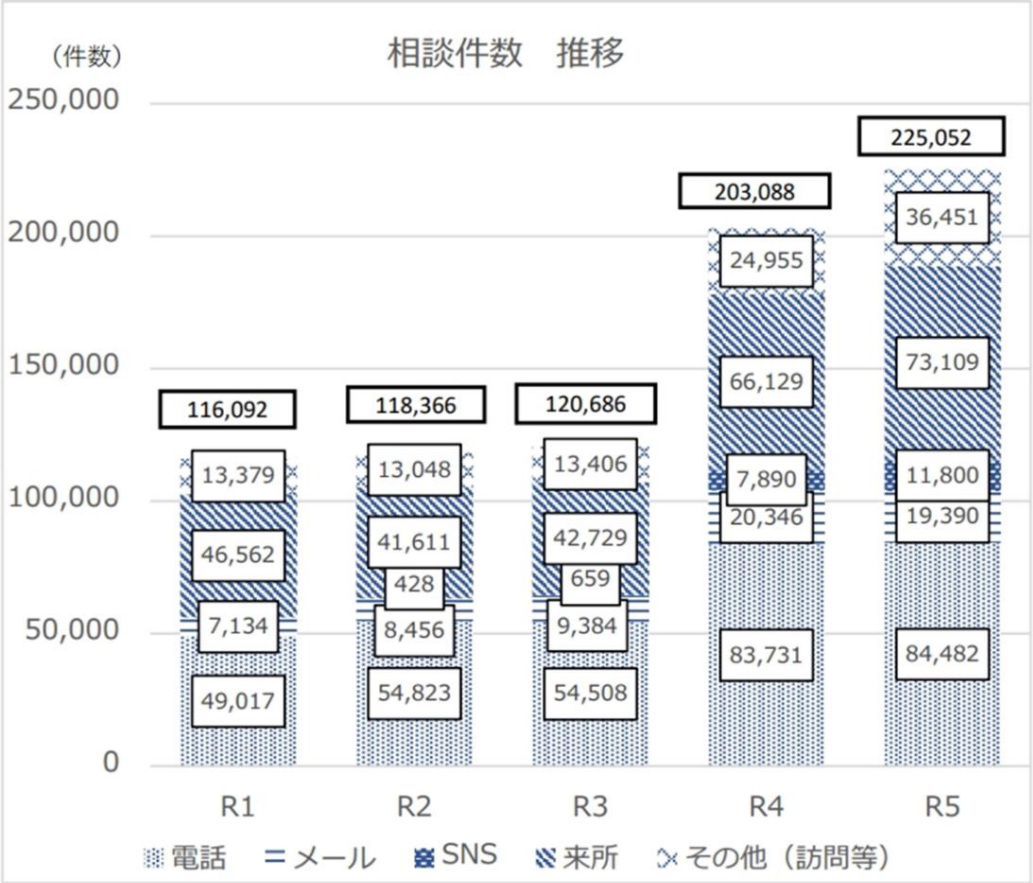
ひきこもり状態の子を持つ家族に対する支援に関する先行研究は、家族全体や母親を対象とするものが多く、父親に焦点を当てた研究は少ない。そこで本研究[1]では、父親の「会」

[1] 本研究は法政大学現代福祉学部の卒業研究をもとに執筆した。

への参加に焦点を当て、運営者や参加者への調査を通して、父親が置かれている状況や「会」に参加したきっかけ、所属団体や公的機関に求める支援を明らかにした上で、ひきこもり状態の子を持つ父親に対する具体的な支援のあり方を考察する。

厚生労働省はひきこもりを「社会的参加を回避し、原則的には 6 か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」と定義している。しかし、ひきこもりという概念がカバーする領域は非常に広く、その定義は曖昧である（厚生労働省，2010）。このため、ひきこもりの定義は団体によって異なり、統一されていない。また、本研究の趣旨としても、父親が自身の子をひきこもりと認識し苦悩している場合、その父親も支援対象として捉えるべきであると考える。したがって本研究では、柴田（2018）の定義に従い、ひきこもりを「親が自身の子をひきこもり状態であると捉え、その考えに基づいた行動をしていること」と定義する。

図 1　ひきこもり地域支援センター等相談件数の推移



※SNSによる相談件数は令和２年度から集計、H30~R3は都道府県・指定都市のみの集計
※令和４年度からひきこもり地域支援センター等の設置を市区町村へ拡大している

出典：厚生労働省（2024）「ひきこもり地域支援センター　ひきこもり支援ステーション等相談実績及び推移」より引用（https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/001298733.pdf, 2024 年 10 月 1 日閲覧）

II. 研究方法

1. 調査概要

（1）運営者に対するインタビュー調査について

本研究は、個人で実施した調査であり、ひきこもり状態の子を持つ父親が会員として参加している 2 つの「会」を対象とした（表 1）。「つづき父親の会」は、ひきこもり状態の子を持つ父親を対象としており、参加者および運営者は全員が父親である。「KHJ 横浜ばらの会」は、家族単位での会員制度を採用しており、学習会や講演会には会員以外の人も参加することができる。両会とも、運営者はひきこもり状態の子を持つ当事者である。

表 1　対象とした親の会・家族会

団体名	つづき父親の会	KHJ横浜ばらの会
設立年	2003年	2016年
対象者	ひきこもり状態の子を持つ父親	ひきこもり状態の人を抱えた家族 （学習会・講演会は誰でも参加可）
会員数	約20名	約60世帯
主な活動内容	例会（月1回）・研修会、講演会 （年4回／その他希望に応じて実施）	例会、交流会（不定期）・学習会、 茶話会（月1回）・講演会（年1回）

本研究に協力を得たのは、つづき父親の会の運営者 2 名と KHJ 横浜ばらの会の運営者 3 名である。運営者に対しては、対面もしくは Google Meet を用いたオンライン形式で半構造化インタビューを実施した。インタビュー対象者の基本属性および調査実施場所等は、表 2 のとおりである。

表 2　インタビュー対象者の基本属性

協力者	年齢	性別	所属団体	団体内での役割・職位	資格	実施日	実施場所
A	70代	男性	つづき父親の会	世話人	精神保健福祉士	2024年8月12日	横浜市西区社会福祉協議会 団体交流室
B	60代	男性	つづき父親の会	会計	特になし	2024年8月18日	横浜市西区社会福祉協議会 団体交流室
C	60代	女性	KHJ横浜ばらの会	会長	特になし	2024年8月20日	オンライン （Google Meet）
D	70代	女性	KHJ横浜ばらの会	副会長	認定心理士	2024年8月20日	オンライン （Google Meet）
E	60代	女性	KHJ横浜ばらの会	事務局	特になし	2024年8月20日	オンライン （Google Meet）

運営者に対しては、活動内容や運営の際に工夫している点、参加者のニーズ把握方法、父親が抱える思い、父親が「会」に参加するために求められる支援について明らかにするため、2024 年 8 月 12 日～2024 年 8 月 20 日に半構造化インタビュー調査を行った。同意を得た上で内容の録音を行い、紙面に記録した。また、一部の対象者から調査後に提供された補足文書も含めて分析データとした。インタビュー時間は平均 106 分である。

（2）参加者に対するアンケート調査について

参加者に対しては、「会」への参加を決めた動機、現在「会」に参加している理由、さらに多くの父親が「会」に参加するために必要な支援を明らかにするため、2024 年 8 月 14 日～2024 年 8 月 31 日に Google Forms を用いてアンケート調査を行った。調査対象者には、研究説明と協力依頼文書を送付し、調査協力の承諾を得た。アンケートの対象者は「会」に参加する父親であり、連絡可能な会員 17 名を対象とした。そのうち 14 名が回答し、回収率は 82.4%であった。なお、本アンケートは個人で実施した調査であるが、つづき父親の会の世話人の協力を得て、アンケートを共同で作成した。

2. 分析方法

インタビュー調査の分析では、調査協力者の同意を得た上で録音を行い、音声データを逐語記録として整理し、質的データ分析法（佐藤，2008）を参考に分析を行った。具体的な手順としては、逐語録を意味の通じるテキストごとに切片化し、類似性のある複数のセグメントを比較して、先行研究との比較検討を行いながら、相応しいコードを生成した。その上で、コード同士の関係性を検討しカテゴリーを生成した。その後、「所属団体に求める支援」のカテゴリーを説明図式により描いた（村社，2012）。なお、信頼性と妥当性の確保のために、データ収集および分析過程において、質的研究に精通する研究協力者 1 名のスーパーバイズを受けた。

アンケート調査では、自由記述回答の内容を概観し、回答を以下の 4 つの観点に分類した上で分析を行った。

①父親が親の会・家族会に参加するきっかけ
②参加前に期待する支援
③継続して参加する理由
④親の会・家族会への参加促進のために国や自治体に求める支援

3. 倫理的配慮

本研究は法政大学「人を対象とする研究倫理」規程を遵守し、対象者には書面にて研究の目的、方法、個人情報の保護、ならびに研究成果をまとめて論文を法政大学懸賞論文に応募することについて説明し、調査協力への同意を確認した上で実施した。具体的には、個人が特定化されないように配慮し、研究への参加は任意であり、研究に協力しないことによる不利益は生じないこと、またインタビュー中答えたくない質問に答える必要はなく、いつでも参加を中止できることを説明した。個人情報の保護については、収集したデータをパスワードで保護されたパソコンで分析し、部外者の目に触れないよう細心の注意を払った上で、個人名はアルファベット化して管理するように配慮した。

III. 運営者に対するインタビュー調査の分析結果

「会」の運営者を対象としたインタビュー調査の分析結果について、父親が置かれている状況、所属団体に求める支援に分けて説明を行う。

1. 父親が置かれている状況

ひきこもり状態の子を持つ父親に対する支援を考察するにあたり、まずはインタビュー調査に基づき、父親の状況を整理する。

ひきこもり状態の子を持つ父親が置かれている状況を分析した結果、【家族内の立場】、【父親の思い】（以下カテゴリー名は【】とする）の 2 つのカテゴリーが生成された。表 3 は、カテゴリー、コード、データの一部を整理したものである。

（1）家族内の立場

【家族内の立場】とは、父親が家庭内で置かれている立場や状況、またそれらに起因して父親が抱く認識や困難な状況を指している。【家族内の立場】は、［経済的役割意識］、［家事不均衡による母親への負い目］、［子との接し方に関する悩み］（以下コード名は［］とする）の 3 つのコードから構成される。

［経済的役割意識］とは、父親が仕事中心の生活を送り、家族を経済的に支えることを自分の役割と認識していることである。父親は「仕事に手いっぱいで」（以下実際の発言内容は「」とする）、家庭内にいる時間が少ない。その結果、子との関わりは少なくなり、子がひきこもり状態であっても会社に行き仕事をすることで「気が紛れる」。このことから、父親は家族を経済的に支えることを自分の役割だと認識しているため、ひきこもり問題に積極的に関わることよりも、仕事を優先するという傾向が伺えた。また、「働くことが当たり前だと思っている方がすごく多い」という語りから、父親は社会に出て働いているため「働くことが内面化」されており、働かずにひきこもり状態となっている子への理解が進みにくい状況にある。

［家事不均衡による母親への負い目］とは、「家事から何まで平等に分担していましたという家なら別ですけど、今の 60 代 70 代でそういう家は珍しいですから」と語られるように、家庭内で家事や子育ての分担が不均衡であることから、母親に過度の負担がかかる状態に対して、父親が抱く負い目のことである。父親は家事や子育てを母親に任せ、仕事中心の生活を送っていた結果、「母親が辛い思いをしている時に助けてやれなかったという負い目」を抱いている。

［子との接し方に関する悩み］とは、父親が子との接し方に困難を感じることである。「子育ては母親がやるのが当たり前なので、今更どう対応していいか分からない」と語られたように、仕事中心の生活を送り家庭内にいる時間が少なく、母親に比べ子育てに参加してこなかった父親は、ひきこもり問題に直面した際に子に対して「どう対応してよいか」分からない。また子育てに参加してこなかったことから、子の問題を「自分事として考えられない」人もいる。このような背景から、父親と子の間に距離感が生じてしまう。

（2）父親の思い

【父親の思い】とは、子のひきこもり問題に直面した際に父親が持つ感情や考えである。【父親の思い】は、［論理的かつ成果志向］、［現状への焦り］、［将来への不安］、［顕在化されていない葛藤や不満］、［同性からの働きかけの重要性］、［行政からの働きかけへの期待］の 6 つのコードから構成される。

［論理的かつ成果志向］とは、父親が問題解決において論理的かつ成果志向な考え方を持つことを指す。父親は子のひきこもり問題に直面した際、「今すぐ現状を打破したい、効果が欲しい」と考え、「自分の子どもが立ち直るのに応用したい」と情報や知識を求める。また、「マニュアル」のような具体的かつ確実な指針を望む場合もある。

［現状への焦り］とは、父親が子のひきこもり状態に対して焦燥感を抱くことである。「特に切実な方は、『現状を打破しようと思って来てるのに、毎回近況報告ばかりでこれじゃあ…』って」と語られたように、支援機関を訪れても子に変化が見られず、同じ状況が続くことに焦りを感じる。その結果、支援機関に通う意味が無いと考えることもある。また、父親だけでなく、母親や兄弟など家族全体が、支援の効果が現れないことに対して焦燥感に駆られることがある。

［将来への不安］とは、父親が子の将来に対して不安を感じることである。これは［現状への焦り］と密接に関わっており、ひきこもり状態が改善されないまま親が亡くなった場合、子はどうなるのだろうと、将来を案じて不安を抱いている。父親の心の中には、常に「これからどうするんだ」、「どう考えるんだ」という問いがある。

［顕在化されていない葛藤や不満］とは、父親の心の中にある無自覚の葛藤や不満である。父親の心には「なんで俺がこうなっちゃったんだ」、「私の子がこうならなかったら」、「何が悪かったんだ」といった不満や後悔の気持ちがあり、ひきこもり問題に対して様々な対策を講じても期待通りにならないことで、怒りが表出することもある。

［同性からの働きかけの重要性］とは、父親にとって同性からの働きかけや支援が重要であることを指す。「男女混合でやってた時にやりにくかったって人が『やっぱり女性と男の視点は違うよね』って言う」という語りから、父親と母親の価値観や気質が異なることが示唆された。また、「どうしても父親って立場的に、母親に対して負い目がありますから」と語られたように、父親が母親への負い目を感じていることから、父親は母親の多い「会」などの環境に居心地の悪さを感じることがある。さらに、同性の方が気持ちを理解しやすいことから、男性が主導するグループは父親が参加しやすいという語りも見られた。

［行政からの働きかけへの期待］とは、行政が主催する研修会や講演会には父親が集まりやすい傾向にあり、父親は行政が行う政策に期待や関心を持っているということである。「地方行政が父親対象っていうのを掲げて何かをしてくれれば」と語られたように、行政がひきこもり状態の子を持つ父親を対象に施策に取り組むことが、父親が支援を受けるきっかけとして有効であると示唆された。

表 3　父親が置かれている状況

カテゴリー	コード	データの一部
家族内の立場	経済的役割意識	父親は、仕事に手いっぱいで、仕事中は何とか忘れている時間が多い。仕事を一生懸命やってると気が紛れる。退職すると、そっち（ひきこもり問題）に意識が行っちゃう。母親は子が身近にいるから、早い時期からひきこもりの問題意識を持つことが多い。ひきこもりが長期になり父親が定年を迎える頃、自宅にいることが多くなり、経済的問題も関係し、先の不安や取り越し苦労に捉われやすくなる(A).精神は勿論きつかったですよ。と言っても毎日会社行ってるので(B).働いているお父様がたくさんいらっしゃって、65 歳くらいまで働きますから、そうすると土日開催の学習会に出てくるのは多少疲れだとか、休みたいという気持ちもあるのかも(C).働くってことが内面化されている気がしますね。当たり前だと思っている方がすごく多い(D).
	家事不均衡による母親への負い目	母親に負い目があるんじゃないですか。全く家事から何からフィフティーフィフティーで平等に分担してましたという家なら別ですけど。今の 60 代 70 代でそういう家は珍しいですからね。母親が辛い思いをしている時に助けてやれなかったという負い目がある(B).
	子との接し方に関する悩み	ひきこもりの子どもの状態が長期となり、どうにもならないと考えた時、ひきこもりの子と共に、父親としての苦しみから逃れられないことを悟る時期がある(A).「子どもが母親にベッタリで…」まあ、そうでしょう。子どもだって父親になんか懐きませんから。母親とは仲が基本的には良いわけですから(B).父親は今まで子育てに参加してこなかった方が多いですよね。なのでどう対応してよいか分からないというところがあるかと思います。仕事一筋でそれ以外のことは一切やらない。家事も手伝わない。そういった団塊の世代の人が、定年になって家にいるようになっても、どう対応していいか分からないっていう。子育ては母親がやるのが当たり前。なので今更どう対応していいか分からない(D).他人事感というか、自分事として考えられないっていうのがすごくあります(E).
父親の思い	論理的かつ成果志向	父親は常に結果と繋げてく(A).今すぐ現状を打破したい、効果が欲しいと思ってコンタクトした団体の 1 つとして親の会に来てらっしゃる。他の父親の家族の情報を得て、自分の子どもが立ち直るのに応用したいとすぐに効果を求めるような気持ちで行ってますから(B).「こうしたらこうなる、何か月後にはこうなるっていう、マニュアルみたいなものはないのか」とおっしゃる父親の方がいて。男性ですから、論理的なところがやはりあるかなと(D).
	現状への焦り	特に切実な方は「私は今現状を打破しようと思って来てるのに、毎回近況報告ばかりでこれじゃあ…」って。その人は焦ってるわけですよ。切羽詰まってる焦ってる人がまずは来るわけですから、誰しも(B).
	将来への不安	「お前これからどうすんだ」、「どう考えるんだ」、「親が死んだらどうするんだ」っていうのは常に（父親の）心の中にある(A).
	顕在化されていない葛藤や不満	本当の心の中には「なんで俺がこうなっちゃったんだ」、「どうしちゃったんだ」、「何が悪かったんだ」それがある時にふっと出てきちゃったりして。できること、自分で思いつくことをやればやるほど巻き込まれていく。巻き込まれていった時に、最後にどうにもならない。自分の思い通りに、計画通りにいかないとすると、感情が出てくる。「私の子どもがこうならなかったら」とか、心の底にある。それが潜在意識の中にあるから意識できない。それが何かの形で出た時に、怒りだとかに気付く(A).
	同性からの働きかけの重要性	母親が多いところに父親が入って親の会に行ってると、母親の気質と父親が合わない。（男女）混合でやってた時に何となくやりにくかったって人が父親の会に来た時に、「やっぱり女性と男の視点は違うよね」って言う(A).どうしても父親って立場的に、母親に対して負い目がありますから。母親が混じっていると参加しづらいでしょうね(B).会に参加しても、母親が多いっていうのは、逆に父親として参加しづらいかなと思います(D).男の方が主催のところは、男の方は参加しやすいみたいですね。男の人の気持ちは男の人が分かるっていうのはあるかもしれませんね。やっぱり男の人が表に立ってるグループは割と男の人は寄りやすいのかなって部分はありますね(E).
	行政からの働きかけへの期待	地方行政が父親対象っていうのを掲げて何かをしてくれれば、そこで1 度参加して良かったと思ったらそこから私達の会に流れていくのかなと。こういう任意団体がありますよ、家族会がありますよという働きかけをしてもらえるんじゃないかという風に思います(C).行政が動いてるところは男の人が参加しやすいっていうのもあるかなと思います。私がこの前研修に参加した時は割と男性が多かったので(E).

注：データはインタビューの逐語録の一部である。

データ中のアルファベットは調査協力者の氏名である。

2. 所属団体に求める支援について

本研究で調査対象とした「会」はいずれもひきこもり状態の子を持つ父親が継続的に参加している。したがって、本稿では、その活動内容や運営方法を踏まえて、「会」に参加している父親が必要とする支援の内容を明らかにする。

ここでは、House（1981）によるソーシャルサポート理論[2]を踏まえて、ひきこもり状態の子を持つ父親が所属団体に求める支援を分析した結果、【情緒的サポート】、【情報的サポート】、【居場所の確保】、【社会資源との連携・協働】の 4 つのカテゴリーが生成された。表 4 は、カテゴリー、コード、データの一部を整理したものである。また、これらの上位カテゴリーの相互関係に基づき概念図を図 2 に示した。

（1）情緒的サポート

【情緒的サポート】とは、ソーシャルサポートの一環であり、「会」が父親に提供する感情面の支えや安心感、共感や慰めを指す。【情緒的サポート】は、［新規参加者が参加しやすい環境づくり］、［発言しやすい雰囲気づくり］、［感情に目を向けた新しい価値観や生き方の発見］、［グループワークでの相互サポート］、［一時中断しても復帰しやすいような配慮］、［個人情報の保護］の 6 つのコードから構成される。

［新規参加者が参加しやすい環境づくり］とは、新規の参加者が「会」に参加しやすいよう運営者が行う配慮や工夫である。たとえば、ひきこもりの定義や年齢による参加制限を設けないことや、参加費と会員費の家族単位制度による金銭面への配慮などがなされている。また、ネームプレートを用意することで、参加者が互いの名前を覚えやすくし、場に馴染みやすくする工夫がなされている。こうした配慮により、新規参加者の父親も安心して「会」に参加することができる。

［発言しやすい雰囲気づくり］とは、参加者が安心して発言できるよう、運営者が行う工夫である。批判的な意見やアドバイスがないよう、ミーティングルールを設け、全員が発言できるよう時間配分を行う。司会進行役は、参加者同士の共通点を見つけ出し、話題を提供する。また、子に変化がなく話題に困った場合は、父親自身の心境を話すように促し、リラックスして発言できるような雰囲気づくりが行われている。

［感情に目を向けた新しい価値観や生き方の発見］とは、父親が「会」の参加により自身の感情に目を向け、子の状態に左右されない新たな価値観や生き方を見つけることである。「切羽詰まって焦ってる人がまずは来るわけですから」と語られたように、「会」に参加したばかりの父親は［現状への焦り］を抱いていることが多い。「悩みを、1 つはカタルシスみたいな形で吐き出すっていう部分もあるんだけど、もう 1 つは深めていかなきゃいけない」、「人生の価値があるんだというところに持っていく」という語りから、参加者は悩みを吐き出すと同時に、自身の感情に焦点を当てながら深めていく過程を経て、現状に納得し、人生の価値を肯定できるようになることが伺えた。

---

[2] House（1981）はソーシャルサポートを、「情緒的サポート、手段的サポート、情報的サポート、評価的サポートのうちの 1 つあるいは 2 つ以上を含む個人間の相互交渉」と定義している。

［グループワークでの相互サポート］とは、グループワークを通じて参加者同士が支え合うことである。「似たような境遇で悩んでる他の父親の姿に接すると多少は気持ちが楽になります」と語られたように、「会」の参加者は全員がひきこもり状態の子を持っているため、共通の悩みを分かち合うことが期待できる。また、「仲間の力です」と語られたように、仲間としての認識を持つことで、「自分だけじゃない、みんないるんだ」と前向きな気持ちを得ることができる。さらに、「参加して半年 1 年経てば『親が思うようにはならないんだな』と分かってくる」と語られたように、他の参加者の近況報告や悩みを聞くことで、［現状への焦り］や［将来への不安］を抱えている父親も現状に納得し、ひきこもり問題を再構築できるようになる。

［一時中断しても復帰しやすいような配慮］とは、何らかの理由で一時的に「会」への参加を中断した父親が、復帰しやすいよう運営者が配慮することである。欠席者には研修会や講演会の内容をメールで配信することで、安心感を提供し、復帰しやすい環境を整える。また、欠席者本人の同意を得て近況を他の参加者に共有することで、参加者が仲間の近況を把握しやすい工夫がなされている。

［個人情報の保護］とは、参加者の個人情報を保護することである。ルールを設けることで、他の参加者の話を他言することや、録音・録画することを禁止し、参加者が安心して自分の近況や思いを話すことができる環境を整えている。

（2）情報的サポート

【情報的サポート】とは、ソーシャルサポートの一環であり、「会」が父親に提供する情報や知識を指す。【情報的サポート】は、［参加者同士の情報共有］、［研修会や講演会の開催］、［参加者ニーズに応じた外部講師の招聘］、［福祉サービスに関する情報提供］の 4 つのコードから構成される。

［参加者同士の情報共有］とは、参加者同士が情報を共有することである。「会」では近況報告などを通じて自身の家族の情報や具体的な出来事を共有する機会があり、他の参加者のケースを自分の子の問題解決に応用したいと考える父親にとって、「会」での情報交換は、必要な知識を得る場となっている。

［研修会や講演会の開催］とは、「会」に専門家や外部講師を招聘して研修会や講演会を行うことである。「子どもを何とかしたい」、「すぐに効果が欲しい」と考える父親や、具体的な制度に関心を持つ父親に対して、研修会や講演会を通じて情報や知識を提供する。また、日程は事前に通知することで、参加者が予定を立てやすいような配慮がなされている。

［参加者ニーズに応じた外部講師の招聘］とは、参加者のニーズに応じて講師を選定し、「会」の研修会や講演会に招聘することである。例会や食事会、茶話会といった場で、参加者の困り事や関心の高い事を「個別に把握」し、子の「ライフステージによって必要になってくる講師」を招聘することで、参加者のニーズを満たしている。

［福祉サービスに関する情報提供］とは、「会」が参加者に福祉サービスに関する情報を提供することである。「会」は、福祉に関する最新の情報を提供し、必要な父親に対して公的機関の相談窓口を紹介することで、公的な支援につなげる役割を果たしている。

これらの【情報的サポート】により、父親は情報や知識を得ることができる。「気持ちを楽にするために知識を得たい」と語られたように、情報や知識を手に入れることで、父親は

気持ちが楽になり、安心感を得ることができる。すなわち、【情報的サポート】が父親の心の負担を軽減し、結果的に【情緒的サポート】にも影響を及ぼしている。

(3) 居場所の確保

【居場所の確保】とは、「会」が居場所としての機能を備えており、父親が安心して参加できる場を提供することである。【居場所の確保】は、［多様な話ができる場の提供］、［息抜きの場］、［新たな出会いの創出］の 3 つのコードから構成される。

［多様な話ができる場の提供］とは、ひきこもり問題に限定されず、多様な話ができる場を「会」が提供しているということである。「会」には、年代や職種などが異なる父親が集まり、様々な分野の話題が交わされる。「多職種がいるからひきこもり問題の話をしなくても、色んな部分の話ができる」と語られたように、形式にとらわれない自由な会話ができる環境が整っている。また、「会」では例会後に希望者による「食事会」が開催され、「そっちを楽しみにしてますって人もいる」という語りから、食事会を楽しみに「会」に参加する父親もいることが伺える。

［息抜きの場］とは、「会」が父親にとって、息抜きの場として機能していることである。「馬鹿話もできる、1 つの息抜きになったわけですよ」と語られたように、父親が自由に愚痴や他愛のない話ができる場となっている。また、「ホッとできる場所、自由に愚痴を聞いてもらえる場所」という語りから、父親は他の参加者との交流を通じて、安心感を得ていることが示唆された。

［新たな出会いの創出］とは、「会」が参加者同士の新たな出会いを創出しているということである。「全然違う世界の人間と出会える」と語られたように、「会」では、職業や年齢が多岐にわたる参加者が集い、日常で出会えない人々との交流が生まれている。こうした出会いに魅力を感じ、「会」に定着する父親も多い。

これらの【居場所の確保】により得られる安心感や共感、慰めが、父親の【情緒的サポート】につながっている。

(4) 社会資源との連携・協働

【社会資源との連携・協働】とは、「会」が専門家や関係機関などの社会資源と絶え間なく連携し、協働することである。【社会資源との連携・協働】は、［専門職・関係機関等との連携を通じた情報発信］、［助成金や補助金の確保］の 2 つのコードから構成される。

［専門職・関係機関等との連携を通じた情報発信］とは、専門職や関係機関等と連携し、彼らを通じて、ひきこもり状態の子を持つ親に「会」の情報を提供することである。具体例としては、県や市のホームページに「会」の情報を掲載することや、関係機関にチラシを配布することが挙げられる。これにより、興味を持った人はいつでも「会」の情報を得ることができる。また、ひきこもり状態の子を持つ親が公的機関に相談に行った際に、職員から「会」の紹介を行うことで、「会」の存在を知らない親もその存在を認知することができる。「まだそんなこと考える余裕のない状態の人は後から思い出して『ああそういえば』って」と語られたように、参加を考える余裕のない父親も、存在を認知することで後から参加を検討することができる。

［助成金や補助金の確保］とは、「会」が行政や関係機関からの助成金や補助金を確保す

ることである。その資金は、講演会費や会場費などに充てられており、「会」の活動維持に欠かせない財源となっている。

これらの【社会資源との連携・協働】は、「会」の活動と密接に関わっている。専門職や関係機関と連携し、講師を招聘して研修会や講演会を開催することが、参加者への【情報的サポート】の提供につながる。また、【社会資源との連携・協働】は新規の参加者を集めるきっかけにもなる。「顔ぶれが何年も変わらないっていうのはやっぱりまずいですから」、「新しい空気が大事」と語られたように、新しい人が参加することで「会」のマンネリ化が防止され、活気ある状態が維持される。「沈滞化した『会』からは元気をもらえませんから」という語りも示しているように、活力ある「会」は参加者にエネルギーを与えている。よって「会」の活性化が、参加者への【情緒的サポート】につながる。また、新しい参加者の入会は、参加者同士の新たな出会いを生み出し、父親が楽しく安心して参加できる【居場所の確保】にも寄与する。したがって、「会」と社会資源は相互に絶えず影響し合い、連携を深めている（図 2)。

図 2　所属団体に求める支援の相互関係

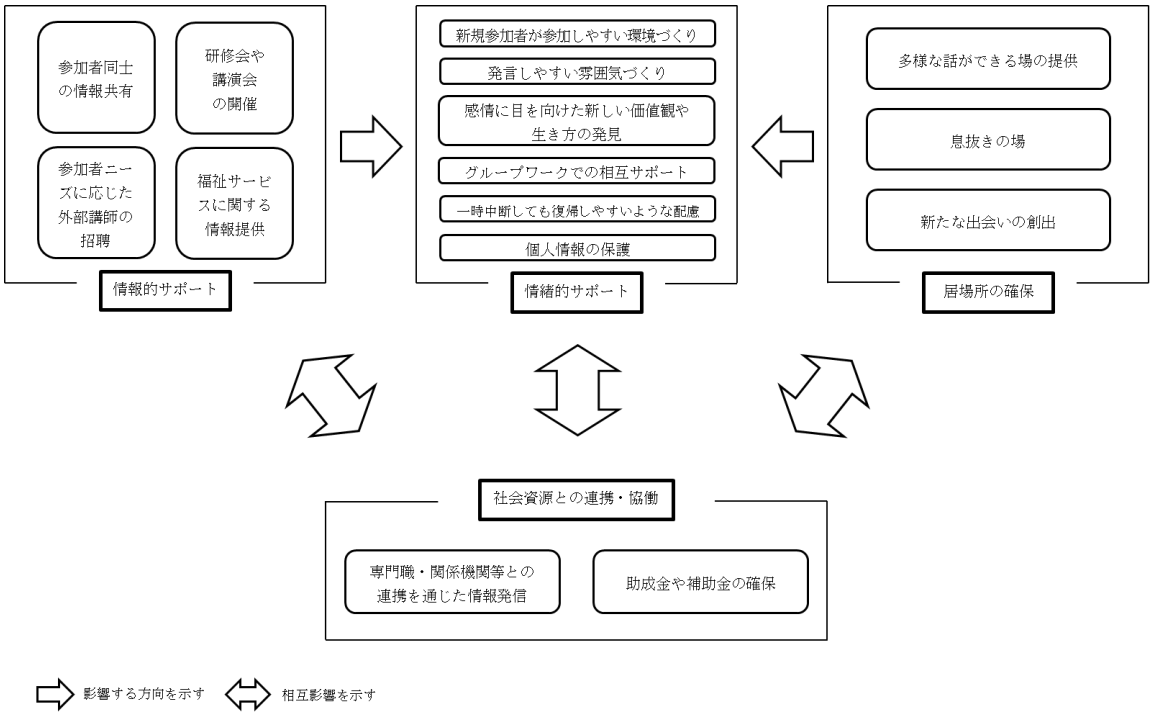


表 4　所属団体に求める支援

カテゴリー	コード	データの一部
情緒的サポート	新規参加者が参加しやすい環境づくり	新規に会員が参加する場合、名前を覚えてもらうため、ネームプレートを準備する(A).ひきこもりの定義や年齢で制限を設けたりはしていないです(B).毎月の学習会は会員外の方も参加できますので、大体会員と会員外の方が半々くらいで参加しております(C).会員を家族単位にしているんです。ですので、ご夫婦で参加していただいても参加費は同じですし、1 単位としています。学習会の参加費は、会員も会員外も家族単位です(D).
	発言しやすい雰囲気づくり	ミーティングルールがある。テーマはその時々で、テーマを決めて話するっていうよりは臨機応変にした方が深まる。言葉と、相手の状態に応じて投げかける。ひきこもりの子の年代、親の年代が会員の中で異なり、直面する課題がバラバラになりがちになるので、できるだけ共通点を見つけ出して話題の進行をする。ひきこもりの子どもの状態に変化がなく、近況の話題が出ない場合が多く、親自身の苦しい心境を話してもらうこともある(A).困った発言をする人がいる時は「それはちょっと言い過ぎですよ」と言ったり(B).
	感情に目を向けた新しい価値観や生き方の発見	「お前これからどうするんだ」、「どう人生を考えてるんだ」という風に思ってた親が、もうそんな質問をしても多分答えは出てこないんだっていうことに納得すること。納得することによって、年中父親が頭の中にそれが渦巻いてるっていう状態が薄まる。悩みを、1 つはカタルシスみたいな形で吐き出すっていう部分もあるんだけど、もう 1 つは深めていかなきゃいけない。そういう子どもの状態があるんだとしても、自分の人生の価値があるんだというところに持っていく。「最近の気持ちの中で、お父さんが何か引っかかったり、辛かったりすることはないですか」って聞いて、親の感情の処理に焦点を当てる(A).切羽詰まってる焦ってる人がまずは来るわけですから、誰しも。何年かやって、「これはちょっと時間がかかるな」、「親も息抜きをしてあんまり抱え込まない方がいいんだな」と、そういう心境に達すればいいんですけどね(B).
	グループワークでの相互サポート	始めは疑心暗鬼で、どんな会かなって来る。それがやっぱり、飲み会か何かで一旦心を打ち明けたら、もうかなり楽になる。仲間の力ですよ。グループ全体の、皆の力。自分だけじゃない、みんないるんだなと。父親の会は、他の父親を鏡として自身を見つめ直す作業の場となる(A).やっぱり似たような境遇で悩んでる他の父親の姿に接すると多少は気持ちが楽になりますよ。参加して半年 1 年経てば「親が思うようにはならないんだな」、「どうすることもできないんだな」と分かってくる(B).
	一時中断しても復帰しやすいような配慮	欠席の場合は、近況を知らせてもらい、本人の同意を得て、例会で仲間の近況として報告している。研修会に参加できなかった会員には、研修会のレジュメや研修会のテープを起こしを会員にメールで配信している(A).
	個人情報の保護	学習会では必ず安心安全のために、ここでのお話はこの場限り、そして個人での録音録画はしないようにというアナウンスをさせていただいております。茶話会でも同じように、ルールというのを作っております(C).
情報的サポート	参加者同士の情報共有	他の父親の家族の情報を得て、自分の子どもが立ち直るのに応用したいという人は、他の家はどうなんだという情報が得られる(B).
	研修会や講演会の開催	関係機関や部署の人を講師としてお招きして、勉強会を行う。子どもが良くなるための情報、知識、勉強会。「子どもを何とかしたい」って親に対する情報提供と研修会。外部講師を呼んで行う研修会を開催して、会のマンネリ化を防止してる。研修会以外は、毎月第2土曜を定例会に設定。研修会は、2か月以上前に設定し、通知をだし、会員が仕事との関係その他で予定を立てやすい工夫をしている(A).参加に困難を感じたことはないですよ。いつも土曜日ですし、土曜日は会社休みなので(B).お父様って社会と子どもをつなぐという役目があると思うので、やはり制度的なものにすごく関心があるんじゃないかと思います(E).
	参加者ニーズに応じた外部講師の招聘	一人ひとりのニーズを明確化して個別に把握する。定例会や食事会で、今何に困っているか、どのような研修をやろうかが自然に話題として出てくる。一人ひとりひきこもりのライフステージによって必要になってくる講師を呼んでる(A).どういったことを皆さんが今知りたい・聞きたいって言うことも考えて用意して学習会などは開催するようにしております。講師の選定にあたっても。(D).茶話会での聞き取りがすごく大事で、皆さんいろいろなニーズがあるので、そういう場で、皆さんがどういうことを悩んで、どんなお話を聞きたいかっていうのを役員は常に考えている(E).
	福祉サービスに関する情報提供	福祉関連の情報が欲しいので、この会とつながっていたい(B).公的機関の相談窓口は相談料が無料なので、ばらの会につながった方には「無料なのでまずどうですか」というご案内を差し上げています。ばらの会は任意の家族会で、運営者も全員母親だったり、当事者ということですので、相談の受付はしていないんです。つまり相談業務はしていない。「専門家への相談をしたい方はこういうところがありますよ」という案内をしています(C).
居場所の確保	多様な話ができる場の提供	多職種がいるからひきこもりの問題の話をしなくても、色んな部分の話ができる。食事会は希望者が3人以上いれば必ず行っている。食事会は父親の職業ばかりか、家族、自身の考え方など情報の宝庫(A).定例会が終わってから食事会に行くんです。そっちを楽しみにしてますって人もいるわけですよね。くだけた話だってできるし(B).
	息抜きの場	必死にメモとるだけじゃなくて馬鹿話もできる。1 つの息抜きになったわけですよね。（会は）ホッとできる場所、自由に愚痴を聞いてもらえる場所(B).家族会は家族にとっての居場所のようなところでありたいと思っています(D).
	新たな出会いの創出	全然違う世界の人間と出会える。多職種が集まってるんですよ。そこに面白みを持つ人たちがいるから人が定着する(A).
社会資源との連携・協働	専門職・関係機関等との連携を通じた情報発信	新規の会員の入会は、専門機関の情報提供とホームページ(A).勿論市とか県のホームページ見に行けば載ってるんですけど、最初の相談窓口で県とか市が「こういう親の会がありますよ」、「父親だけの会もあるんですよ」と言ってくれたら良いと思います。まだそんなこと考える余裕のない状態の人は後から思い出して「ああそういえば」って(B).私達のチラシを配架してくれたり、そこから参加される方も何名かいらっしゃってます(D).
	助成金や補助金の確保	会では県の方から協力金をいただいています(C).助成金をいただいたりだとか(D).

注：データはインタビューの逐語録の一部である。

データ中のアルファベットは調査協力者の氏名である。

IV. 参加者に対するアンケート調査の分析結果

1. 回答者の基本属性

アンケート回答者 14 名の基本属性は、以下のとおりである。回答者はすべて父親で、年代は 70 代が 7 人で 50%、60 代が 4 人で 29%、50 代が 3 人で 21%であった（図 3）。「会」への参加頻度は、所属する団体の例会もしくは学習会の実施頻度と同様の『月に 1 日程度』が最も多く 12 人で 86%、『数か月に 1 日程度』が 2 人で 14%であった（図 4）。ひきこもり状態である子の年代は 20 代、40 代がそれぞれ 5 人ずつで 36%、30 代が 4 人で 28%であった（図 5）。子の性別は男性が 10 人で 72%、女性が 3 人で 21%、その他が 1 人で 7%であった（図 6）。

図 3　アンケート回答者の年代

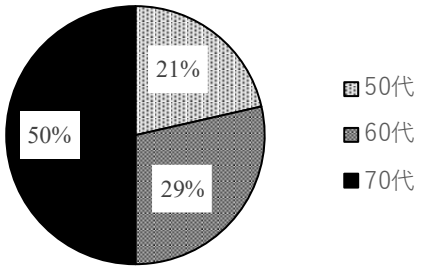


図 4　親の会・家族会への参加頻度

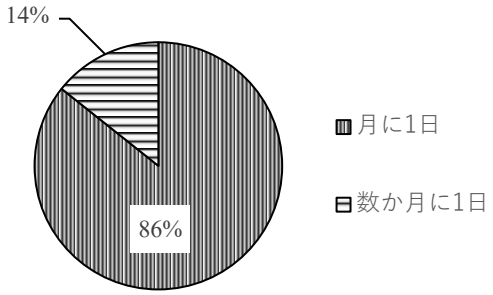


図 5　ひきこもり状態である子の年代

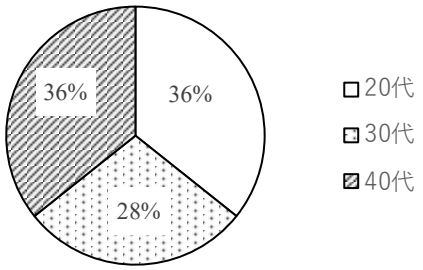
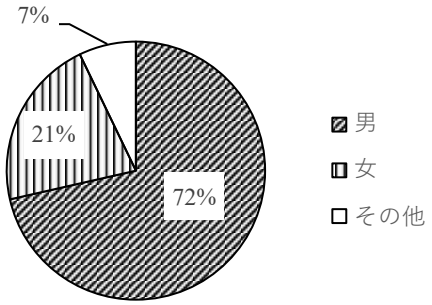


図 6　子の性別



2. 自由記述回答からの分析結果

（1）父親が親の会・家族会に参加するきっかけ

最も多く見られた回答は、『ホームページ・パンフレット』と『妻からの紹介・勧め』であった。

『ホームページ・パンフレット』では、「インターネットで調べていた時、目に入ったから」、「公共機関でパンフレット入手」など自主的に「会」の情報へアクセスしたという記述も見られた一方、「支援センターよりパンフレットを受け取りました」といった公的機関か

らのパンフレット提供により参加を決めたという回答も含まれていた。

『妻からの紹介・勧め』では、「妻が情報を得て参加を勧めた」、「妻に参加を打診されたから」といった記述があり、母親が参加することのできない父親の会においても、配偶者が父親より先に情報を入手している場合が見受けられた。

次に多く見られた回答は『行政機関・専門職からの紹介』であり、「行政の支援課で紹介を受けた事」、「市の開催した研修会で家族会を知り参加した」、「青少年センターのカウンセラーからの情報提供」など、相談窓口や行政主催の研修会・講演会といった公的機関からの情報提供が挙げられた。

さらに『所属団体（親の会・家族会）からの説明』という回答も見られ、「家族会からの説明を聞き、入会しました」、「『会』を見学し、例会後の食事会含めて違和感なくなじめました」など、「会」から直接説明を受けることや見学をすることが参加のきっかけとして挙げられた。

（2）参加前に期待する支援

「会」への参加を決めた際の気持ちについて、「この先ひきこもりの子どもはどうなってしまうのだろうという不安感」、「家族として孤立の不安」、「藁にも縋る気持ち」など現状への不安や焦りに関する記述が見られた。また「有用な情報を手に入れるためです」、「理解を深める為に入会」といった、ひきこもり問題に関する情報や知識を求める記述も見られた。さらに、「同じ境遇の人と交流することで何か自分の心に変化があるかもと感じた」という、他の親との交流を目的とした意見も見られた。これらの記述内容から、『不安や焦りの解消』、『情報や知識の入手』、『他の参加者との交流』が父親の求める支援であると考えられる。

（3）継続して参加する理由

まず、1 つ目の理由として、「各家庭の状況を知り自分の状況を話すことで、1 人で悩まずストレスが緩和される」、「自分の家族だけという孤立感が消える」、「参加すると力をもらえる」などの記述から、悩みの共有や他の親との交流による孤立感の解消といった『情緒的サポート』が挙げられる。

2 つ目の理由としては、「参加者との情報交換」、「講師（医者・体験者・支援者等）を招聘し講演をいただくことで病気に対する知識・対応・行政サービス等の状況を確認することができる」、「福祉関連情報の入手」という内容から、「会」に参加することで入手できる他の家の情報や、研修会・講演会で学ぶことのできる知識といった『情報的サポート』が挙げられる。

3 つ目の理由として、「いろいろな職種の人との交流ができるから」、「いろいろな職種を経験した人との交流が楽しい」といった記述内容から、『参加者との交流』自体に楽しみを見出した父親も「会」へ継続して参加していると考えられる。

（4）親の会・家族会への参加促進のために国や自治体に求める支援

最も多く見られた記述は、「行政内の専門家を親の会の要請により派遣して欲しい」、「外部講師招聘に対する補助」といった『専門職・講師の意見を多く聞ける環境づくり』に関する内容であり、「会」へ求める支援として多くの父親が『情報的サポート』を挙げているこ

とからも、父親が専門職や外部講師から多くの情報や知識を入手することができる環境を求めていることが伺える。

次に多く見られた記述は、「『会』の紹介を国や自治体のホームページに掲載」、「親の会を必要とする親に情報提供して欲しい」といった『家族への情報提供』に関する内容であり、公的機関から情報を入手している父親も多いことから、公的機関と連携した情報発信が求められる。

また、「公共施設の提供」、「家族会への積極的会場の提供」といった『集いの場の提供』に関する記述も見られ、多くの父親がアクセスしやすく、公共施設など馴染みがあり安心できる会場が、参加しやすい「会」につながると考えられる。

V. 考察

本研究では、ひきこもり状態の子を持つ親を対象とした「会」の運営者へのインタビュー調査と、「会」の参加者である父親へのアンケート調査の分析により、父親が置かれている状況や「会」に参加したきっかけ、所属団体や公的機関に求める支援を明らかにした。これらの分析結果をもとに、ひきこもり状態の子を持つ父親に対する支援のあり方について考察する。

1. 父親に対する子育て支援の強化

ひきこもり状態の子を持つ父親が、母親に比べ支援やサポートを受けていない理由として、家族内の立場が大きな影響を与えていることが示唆された。本調査において、父親は経済的役割意識を持っており、仕事中心の生活を送っているため、母親に比べ子に関わる機会が少ないことが明らかになった。この結果は、父親の育児参加には、仕事を主な役割とする従来の役割分担意識が関係しているという多喜代ら（2019）の知見と一致している。したがって、父親の性別役割分業意識を緩和するために、子育て世帯の父親を対象とした、育児に参加しやすい環境づくりや、子育て支援の充実が求められる。しかし、小崎ら（2021）は、現在の支援体制において父親は育児の主体として十分に認識されておらず、子育て支援における父親への支援があまりなされていない現状を指摘している。こうした環境において、これまで子育て支援を受けてこなかった父親が、子がひきこもり状態になった際に速やかに支援機関とつながることは困難である。そのため、父親に対する子育て支援を強化し、父親が積極的に育児に参加できる環境を整備することが、ひきこもり状態の子を持つ父親が支援につながりやすい環境を醸成すると考えられる。

父親支援に積極的に取り組む自治体の例として、豊島区や横浜市が挙げられる。東京都豊島区では、男性育児支援プロジェクトの一環として、父親同士の懇談会の開催や、「父子手帳リーフレット」の配布を通じ、父親の精神面および知識面をサポートする取り組みが行われている（豊島区，2024）。また、神奈川県横浜市では、父親向けの育児支援講座を身近な施設で開催しているほか、子育てパパ応援ウェブサイト「ヨコハマダディ」を通じて、父親向け講座や親子で参加可能なイベントの情報を提供するなど、積極的な情報発信が行われている。（横浜市，2024）。このように、父親に対する子育て支援が強化されることで、父親が育児に参加する機会が増加し、性別役割分業意識の緩和につながると考えられる。従来の家族内の立場が変化することにより、将来的にひきこもり状態の子を持った父親が支援につながりやすい社会の形成が期待される。

2. 親の会・家族会への参加促進のためのきっかけづくり

ここでは、調査結果を踏まえて、父親が「会」に参加するきっかけとして有効な方法を 3 点挙げる。

第 1 に、男性が「会」の運営に携わることが挙げられる。本調査では、父親は同性からの働きかけを求めていることが示唆された。したがって、「会」の運営者に男性がいることで、父親は「会」に参加しやすくなると考えられる。

第 2 に、研修会や講演会の開催が挙げられる。本研究の調査結果によると、情報的サポートを求めて「会」への参加を決める父親は多い。よって、具体的な制度や福祉サービスに関する研修会や学習会、外部講師を招聘した講演会を積極的に開催することが、父親の参加を促す有効な手段となる。

第 3 に、「会」が専門職や関係機関と連携しながら、ひきこもり状態の子を持つ家族に対して情報提供を行うことが挙げられる。父親は行政からの働きかけに期待している傾向があるため、公的機関によるチラシやパンフレットの配架、ホームページでの掲載、相談窓口による「会」の紹介などが、父親の「会」参加のきっかけとして有効である。また、配偶者の紹介を受けて「会」に参加する父親も存在するため、父親を主対象とした「会」であっても、父親に限定せず家族全体に対する情報提供が求められる。さらに、現時点で「会」の支援を必要としていない家族にも情報提供を行い、いつでも「会」の情報にアクセスできるような環境を整備することで、関心を持った時点で参加を検討できる状況を作り出すことが求められる。

3. 親の会・家族会による父親支援について

「会」による支援の中で、特に父親支援に求められるのは、①ソーシャルサポート、②居場所としての機能、③人間関係の構築である。これら 3 つの支援内容について、以下にそれぞれ説明する。

(1) ソーシャルサポート

「会」が提供するソーシャルサポートは、主に情緒的サポートと情報的サポートに分けられる。

情緒的サポートは、父親がひきこもり問題を再構築する過程を支える重要な支援である。内藤ら（2014）は、父親がひきこもり問題に向き合うためには、ひきこもりに対する認識を変化させ、問題を再構築する必要があると指摘している。そのためには、父親が現実を受容し、元に戻るという希望を半ば捨て、現在のひきこもり状態にある子の強みや新たな生き方を理解しなければならない（内藤ら，2014）。「会」による情緒的サポートは、こうした過程を支える機能を持つ。「会」では、現状への焦りを抱える父親に対して、グループワークを通じて情緒的サポートを行う。父親は他の参加者の話を聞き、自身の感情と向き合うことで、「時間がかかる問題なんだ」、「思うようにはならないんだ」といった認識を持つようになる。内藤ら（2014）は「問題の再構築がなされつつある段階では特に父親の苦悩を十分汲み取っていくことが必要である」と論じており、「会」による情緒的サポートはまさにその役割を担っている。父親が現実を受容することは、子の人生を肯定すると同時に、父親が自身の人生の価値を認め、前向きに生きるための重要なステップとなるといえよう。

情報的サポートは、情報や知識を求める父親のニーズに応える重要な支援である。本調査によれば、「会」に参加する前の父親も、継続して参加する父親も、参加者との情報交換や、講師による研修会や講演会、福祉関連情報の入手といった情報的サポートを求めていることが明らかになった。特に、「参加者を増やすのに一番有効なのは、講師を呼ぶこと」、「講師を招聘し講演をいただくことで病気に対する知識・対応・行政サービス等の状況を確認す

ることができる」といった意見が示すように、父親は専門職や外部講師からの情報を求めている。よって、「会」は専門職や関係機関と連携し、参加者のニーズを把握した上で、研修会や講演会を継続的に開催することが求められる。

（2）居場所としての機能

父親にとって「会」は安心できる居場所である。この点は、先行研究（真壁ら，2014）における「会」のメンバーを対象とした調査結果とも一致している。また、「会」では職業や年齢が異なる参加者同士が出会い、ひきこもり問題に限定されず多様な話題が交わされる。さらに、「懇親会（食事会）があってこその父親の会だと思う」、「交流が楽しい」と語られたように、懇親会や食事会を通じて交流を深めることが、父親にとって「会」に参加する意義の 1 つであることが示されている。このように、「会」が父親にとって安心できる居場所であり、ひきこもり問題に限らず多様な話ができる場として機能していることが、父親支援において重要である。

（3）人間関係の構築

「会」の運営者は、例会や茶話会、食事会での会話を通じて、参加者の気持ちを汲み上げ、現状やニーズを把握している。これには「個別化」の視点があり、父親と個別に向き合うことで、運営者と参加者、または参加者同士という枠に縛られることなく、人間関係が構築されていることが伺えた。職業や生い立ち、個々の関心事に至るまで、ひきこもり問題以外の話題も共有することで、父親同士の交流が深まっていく。このように、「会」では参加者同士の人間関係が築かれている。内藤ら（2014）は、ひきこもり問題においても父親は外に社会的な関係を求める傾向があると指摘しており、「会」での人間関係の構築は有効な支援であることが示唆される。

さらに、「会」に継続して参加する父親は、他の参加者との関係性が構築され仲間意識が芽生えたことを、参加の理由として挙げている。平田（2005）は、子が通う学校でのつながりを基盤にしている父親の会の調査研究の中で、「父親同士の仲間意識は、父親自身の問題解決や精神衛生の向上に寄与するだけではなく、参加する動機の要因とも認められる」と述べており、ひきこもり問題においても同様に、仲間意識が「会」への参加を促進する要因となっている。

4. 今後の課題

本研究において、今後の課題として 3 点を挙げる。

1 点目は、高齢による健康問題への配慮である。8050 問題で明らかになっているように、現在ひきこもり問題では長期高齢化が深刻な課題となっている。本研究で調査対象とした「会」においても、高齢による健康問題を理由に参加できなくなった参加者がいることが指摘された。したがって、高齢の父親も安心して「会」に参加できるような環境整備が必要である。具体的には、参加者が地域内で日常的に通える場所での開催や、高齢者にも操作しやすいオンライン環境の導入などが挙げられる。また、本調査においても、父親は国や自治体に対し、集いの場の提供を求める意見を出している。よって、公的機関が積極的に「会」へ

アクセスしやすい会場を提供することが、高齢の父親への支援における課題の解決につながると考えられる。

2 点目は、若年層の参加促進である。「現在父子ともに年齢の高い層が中心になっているので、若年層の集まりの場を設けると、若い父親が参加しやすくなるかもしれません」といった語りから、若年層の参加が少ないことが課題として挙げられる。様々な年代の父親と交流できることは「会」の魅力であるが、同年代の参加者が少ないことは若年層の参加を阻害する要因となっている可能性がある。したがって、アンケートに記載されているように、若年層の集まりの場を設けることや、若年層に向けた広報活動といった、若年層の父親が参加しやすいような取り組みが求められる。

3 点目は、地域に潜在するニーズの掘り起こしである。本調査に協力してくださった参加者は、いずれも支援を求めて「会」につながっている。しかし、支援を求めない、または求められない父親にも目を向ける必要がある。そのため、地域に潜在するニーズを掘り起こすことが重要である。潜在する父親のニーズを明らかにすることで、「会」における支援のあり方がさらに改善され、ひきこもり状態の子を持つ父親に対する支援がより効果的なものになると考えられる。

VI. 結論

本研究は、父親の「会」への参加に焦点を当て、運営者や参加者への調査を通じて、ひきこもり状態の子を持つ父親に対する具体的な支援のあり方を明らかにしたものである。その結果、まず前提として、すべての父親に対する子育て支援を強化する必要性が認められた。ひきこもり状態の子を持つ父親に対する支援としては、「会」への参加を促進するためのきっかけづくりが重要であることが示された。また、「会」は、行政の福祉局や青少年センター、福祉事務所などの社会資源と連携・協働を行うことが不可欠であり、専門職を招聘して講演会を開催することや、公的機関の情報提供により新規の参加者を増やすことが「会」の活性化につながり、父親のニーズを満たすと考えられる。さらに、「会」は父親にとって情緒的サポートや情報的サポートを得る場であると同時に、楽しいと感じられる居場所であることが重要であり、そのための環境や雰囲気づくりが、父親の「会」への定着につながることが示唆された。

今後ひきこもり問題はさらなる長期化が見込まれ、昨今では「9060 問題」にまで発展している。親をひきこもり状態にある子の最たる支援者と位置づけるならば、その親は誰を頼るべきであろうか。「会」はそのような親を支援する団体の 1 つであり、父親が「会」で支援を受けることが、ひきこもり状態の子を持つ父親の孤立を防ぐことにつながると考えられる。また、「会」をはじめとした団体や関係機関、公的機関や専門職が連携し、社会全体が協働して支援のネットワークを構築することで、より包括的で効果的なひきこもり家庭に対する支援の実現が期待される。

最後に、本研究の限界について述べる。第 1 に、今後はより多様な「会」を対象に調査を行うことで、所属団体による違いを検討する必要がある。第 2 に、本研究の調査対象者となった父親の多くは配偶者と同居しているため、父子世帯のニーズに対しても耳を傾け、支援のあり方を明らかにすることが今後の課題である。

参考文献

・Akiko Funakoshi＆Yuki Miyamoto（2015）*Significant factors in family difficulties for fathers and mothers who use support services for children with hikikomori*. Psychiatry and Clinical Neurosciences，69（4）：210-219.

・花嶋裕久（2018）「ひきこもりの息子をもつ親の体験プロセス―ひきこもりへ移行してから危機的状況を脱するまで」『質的心理学研究』17（1）：25-42.

・平田裕美（2005）「『父親の会』活動の意義と機能」『子ども社会研究』11（0）：86-99.

・House，J，S.（1981）*Work stress and social support*. Addison-Wesle.

・厚生労働省（2003）「『ひきこもり』対応ガイドライン」（https://www.mhlw.go.jp/topics/2003/07/tp0728-1d2.html，2024 年 8 月 9 日閲覧）.

・厚生労働省（2010）「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」（https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000807675.pdf，2024 年 9 月 14 日閲覧）.

・厚生労働省（2024）「ひきこもり支援推進事業」（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/hikikomori/index.html，2024 年 9 月 25 日閲覧）.

・厚生労働省（2024）「ひきこもり地域支援センター　ひきこもり支援ステーション等相談実績及び推移」（https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/001298733.pdf，2024 年 10 月 1 日閲覧）.

・小崎恭弘・髙木悦子（2021）「全国都市自治体の父親支援実施現状に関する研究～子育て支援担当者調査より～」『令和 3 年度厚生労働科学研究費補助金 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業（健やか次世代育成総合研究事業）分担研究報告書』（https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/report_pdf/202107007A-buntan3.pdf，2024 年 9 月 19 日閲覧）.

・真壁あさみ・本間恵美子・斎藤まさ子・ほか（2014）「ひきこもり親の会メンバーの相談についての体験」『新潟青陵学会誌』6（3）：45-52.

・松本訓枝（2021）「ひきこもりと家族支援―家族関係学の可能性―」『家族関係学』40（0）：81-91.

・村社卓（2012）「チームマネジメントの未活用要因および活用条件――ケアマネジメント実践におけるチームマネジメント概念の検討」『社会福祉学』53（2）：17-31.

・内閣府（2023）「こども・若者の意識と生活に関する調査報告書」（https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12927443/www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r04/pdf/s3.pdf，2024 年 8 月 9 日閲覧）.

・内藤守・斎藤まさ子・本間恵美子・ほか（2014）「父親がひきこもりの問題に向き合うプロセス」『新潟青陵学会誌』6（3）：25-33.

・野中俊介・境泉洋・加藤隆弘（2023）「ひきこもり状態にある人の家族が認識する家族会の機能」『カウンセリング研究』55（1.2）：17-26.

・斎藤環（1998）『社会的ひきこもり　終わらない思春期』PHP 研究所.

・佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法――原理・方法・実践』新曜社.

・柴田瑛司（2018）「ひきこもりの子を持つ親の苦悩に関する研究：苦悩の理解から支援のあり方を考える」，2017 年度東京大学大学院新領域創成科学研究科修士論文，p5.

・多喜代健吾・北宮千秋（2019）「父親の育児参加への育児参加要因およびソーシャルサポートの影響」『日本看護研究学会雑誌』42（4）：4_763-4_773.

・特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会（2023）「オンラインを活用したひきこもり支援の在り方に関する調査報告書」（https://www.khj-h.com/wp/wp-content/uploads/2023/03/2023KHJ%E5%85%A8%E5%9B%BD%E5%AE%9F%E6%85%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8_230331.pdf，2024 年 8 月 9 日閲覧）.
・豊島区（2024）「父子手帳リーフレットを配布します（妊娠期からの男性育児支援プロジェクト）」（https://www.city.toshima.lg.jp/258/2409061528.html，2024 年 9 月 22 日閲覧）.
・豊島区（2024）「パパの応援講座」（https://www.city.toshima.lg.jp/265/kosodate/kosodate/shiencenter/koza/014058.html，2024 年 9 月 22 日閲覧）.
・東京都（2021）「ひきこもりに関する支援状況等調査結果」（https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/seikatsu/hikikomori/kyougikai/R3chosakekka.files/r03chosakekka-1.pdf，2024 年 8 月 9 日閲覧）.
・東京都ひきこもりサポートネット（2024）「ご家族、ごきょうだいの方へ」（https://www.hikikomori-tokyo.jp/case2.php，2024 年 9 月 25 日閲覧）.
・渡邉七瀬（2024）「ひきこもり状態の子を持つ父親に対する支援のあり方に関する研究―親の会・家族会に着目して―」2024 年法政大学現代福祉学部卒業論文.
・横浜市（2024）「父親育児支援」（https://www.city.yokohama.lg.jp/kosodatekyoiku/kosodateshien/shiensodan/titioyaikujisien.html，2024 年 9 月 22 日閲覧）.

巻末資料

1. 運営者に対するインタビュー調査の質問項目

（1）調査協力者について

①「年齢もしくは年代をお伺いしてよろしいでしょうか。」
②「活動に関する所持資格がありましたら、教えてください。」
③「〇〇さんの、団体内での役職や立場をお願いいたします。」
④「活動年数を教えてください。」

（2）「会」の運営について

①「運営を行うにあたっての、心構えや工夫、留意点を教えてください。」
②「どのように会員のニーズを把握していますか。」
③「参加者を増やすために行っている取り組みはありますか。」
④「専門職や関係機関との連携のあり方を教えてください。」

（3）ひきこもり状態の子を持つ父親について

①「父親が参加しやすい『会』とはどのようなものだと考えますか。」
②「父親はどのような思いを抱えていますか。」
③「〇〇さんが父親にとって必要であると考える周囲からのサポートはありますか。」
④「父親にとって、『会』とはどのような存在ですか。」

2. 参加者に対するアンケート調査の質問項目

Q1. 本アンケートは父親を対象として行っております。お間違いありませんか。（はい）

Q2. ご自身の年代（30 代，40 代，50 代，60 代，70 代，80 代，90 代，その他）

Q3. ひきこもり状態の子の年代（10 代，20 代，30 代，40 代，50 代，60 代，その他）

Q4. 子の性別（男，女，その他）

Q5. 親の会・家族会への参加を決めた時の気持ちや、きっかけとなった出来事は何ですか。（自由記述回答）

Q6. 親の会・家族会へ参加するにあたって、誰からの勧めや手助けがありましたか。（家族，所属団体〈親の会・家族会〉，専門職，ホームページ・パンフレット，特になし，その他）

Q7. 上記の質問に関連して、具体的にどんなサポートがありましたか。ex）妻からの勧め、家族会からの説明、専門職からの情報提供など（自由記述回答）

Q8. 親の会・家族会への参加頻度をご回答ください。複数参加している場合は全てを含む（週 1～2 日，月に 2、3 日程度，月に 1 日程度，数か月に 1 日程度，半年に 1 日程度，年に 1 日程度，それ以下，研修会のみ参加，その他）

Q9. 現在、親の会・家族会に参加している理由は何ですか。（自由記述回答）

Q10. 今後、より多くの父親が親の会・家族会に参加するために、国や自治体に求める支援やサービスはありますか。（自由記述回答）

謝辞

本論文の作成にあたり、担当教員である洪心璐先生には本当にお世話になりました。分析にもご協力いただき、メールや電話での個別面談を通じて絶え間なく熱心なご指導・ご助言をくださったため、安心して執筆を進めることができました。洪先生の励ましやお気遣いの言葉に支えられ、論文を完成させることができました。

ゼミの担当教員である眞保智子先生にも大変お世話になりました。眞保先生から学んだ地域に潜在する生きづらさや社会モデルに関する視点は、3 年間ゼミで福祉を学び考える中で自分の軸となりました。

そして 3 年間共に学んだ眞保・洪ゼミの仲間がいたからこそ、自分の考えを深めることができました。本当にありがとうございました。

また調査にご協力くださったつづき父親の会、KHJ 横浜ばらの会の皆様に深く感謝の意を表します。参加者、運営者の方がご協力くださり、質問に対し真摯にお答えくださったからこそ、当事者の声から現状への理解を深めた上で本論文の執筆を行うことができました。代表の方は突然のご連絡にも関わらず親身にご対応してくださり、インタビューの日程調整やアンケート調査ご協力の呼びかけなど、ご多忙の中お力添えいただき心より感謝申し上げます。

つづき父親の会の世話人である A 氏には、調査へのご助言やアンケートの共同作成、資料の提供など多大なご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

最後に、ここまで励まし支えてくれた両親に心より感謝いたします。母はテーマ決めから論文執筆まで相談に乗り、方向性について迷う度にいつも自分の問題関心や軸を思い出させてくれました。母が話を聞いてくれたことが心の支えになりました。そして、ここまで勉強に専念できる環境を整えて 4 年間大学に通わせてくれた父には本当に感謝しています。

本研究にご協力くださった方々に、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。